

大阪文学史の構想

明 石 利 代

はじめに

史学の方面では最近、従来の多分に好事家的な郷土愛的な郷土史ではなく、日本史全体の視野からその全体的研究を推進するものとして地方史が考えられ採上げられてきているように見うける。文学は歴史と同じではないがやはり同様に地方文学史は考えられてよいのではなからうか。そこで「大阪文学史」ということで地方文学史の問題を考えてみたい。が、長期間の文学事象を私の力では到底扱えぬ。ただ割合に詳しく調べかけた明治期だけに限ってそこから何かの問題をひきだそうとするにすぎぬ。然しこれは任意に似て任意でない。何故なら既に岡野他家夫氏が明治期文芸雑誌の概観を行って二十年代から三十年代にかけての関西文人の活躍は文学史的に無視できず大阪を中心とする関西文壇の存在を指摘しておられる（『文学』一九五六年一〇月）。従って他の時期の、他の地方の文学の所在を探るよりも問題と意義のあるのを予め意識してのことではある。

一
表題のような問題を考えるに当っては「はじめに」も述べたが、先ず前提として大阪に果して何らかの文学の動きがあったかどうか

を知る必要がある。過去の元祿期にはあったが、明治期にはないのではないか。ないものを探るのは無駄である。然しとにかく地方とは云い条、東京に最も大きく対立し得る地方の中心であって、何らかの意味での文化的なもの存在は予想してよいはずと思われる。若し又そういうものがない場合でも、これだけの地方的中心であるのに文化的なものが育たなかった理由は当然探られねばならぬ。いずれにしても大阪の土地の文学状況の有無を調べることは、文学史全体の問題にかかわる何らかの示唆を含んでいるはずのものと考えられる。一応これだけの意義づけを考えて手がかりを求めると、まず大阪に於て文学的教養の基礎をふみだした者で中央の文壇に進出した者達の青少年期の回想が単行本なり雑誌掲載の形で刊行されている。その中で最も系統だつて「大阪文学史」的なものへの想いをこめて述べているのが河井醉茗である。『文庫』の詩人として派手ではないが着実な文学上の業績をなした彼は堺の旧い商家に生れ育った人として大阪人的な血を最もうけている人ではないかと思われるだけに、その回想記は単に大阪に於ける文学的な動きの事実を知るといふ以上に大阪と文学との関係について最も示唆深いものがあると考えられる。彼については高須芳次郎（梅溪）達にも略、同時代

の大阪の文学についての回想があり、彼等もまた大阪文学史への意欲をみなぎらせている。もとより此等はいずれも個人中心の回想記であって、そこには極めて強く主観が働き、そのまま鵜呑みにはできぬが、とにかく何らかの意味で中央の文学の動きの中に足をふみいれ中央文学史の領域に直接かかわっている者達が大阪文学史を主張しているのはその可能なことの裏づけとなる。一方彼等が後になって回顧している大阪の文界は当時の中央文界からはどのようなみられ考えられていたであろうか。

明治期の中央誌として文学の動きを推進する力を持っていたと目されるものに『早稲田文学』『帝国文学』がある。此等の雑誌欄には当時の文界の動きが時評という形で採上げられ、そのことによってこの雑誌そのものをも含めた当時の文界の動きを端的に知り得る材料となっている。所で、そうした中に地方の文学の動きについての関心も示され、特に大阪への関心の強いのが認められる。こうして文学の場に於て大阪という土地が地方を代表するものとして特に採上げられるのは、其等の文章の中から、大阪が社会的経済的事情に於て最も東京に対抗し得る土地であること、近き世に文化の中心として近松・西鶴の文学を有したことに基づいているのが知られる。つまり大阪に文学を成立たせうるだけの伝統と社会経済的地盤とが具わっていることが反省されているのである。然し現状に関してはいずれも悲観的である。尤もこれは文化的なものの文学的な動きが大阪の土地に現在全然ないというのではなく、唯高度なものが充分に成育していないというのである。要するにこうした批判のもとに大阪への関心が示されているのは、大阪中心の文化・文学の醸成が中央に於て強く望まれているのを意味してもいるとみられる。このよ

うに中央に於て、中央に対立しうる高度な文化への意欲が表われるとなると、それは地方文化育成への親切的な刺激となる。

ここに一応地方文化・地方文学の健全な発達のための一つの条件が大阪という土地をめぐって具わっているのが認められるが、何といっても最も肝要なのはこういう外部の要望に応えて切実な内部の要求があるかどうかである。『早稲田文学』『帝国文学』等の中央誌の簡単な批評と紹介とからは、やはりそうした意欲が働いているらしいことも窺える。そうなると、ここに一応文学史を成立たせるだけの動きが大阪という土地に具体化していることになり、「大阪文学史」というものを考えることが可能となる。然しこれだけでは単に可能ということがわかるのみで、その性格・意味については何らの手ばかりも得られない。その手がかりは何に求められるであろうか。

二

大阪文学史の内容的な意味については、やはり具体的に最も顕著な文学の動きを調べることにより明らかにされるものと考えられる。それにつき最も示唆となるのはやはり酔茗の回想記であろう。何故なら彼は明治の中央文学史に当然名を記される人であって、或る時期の大阪の文学の運動にも重要なかわりを持つ。当然そこには中央文学史との交渉の存在が予想される。酔茗の青年期の大阪の文壇といったようなものについての回想記はいろ／＼あるが、その一部を採上げると、明治「二十六七年頃から一時京阪文学は盛んであった。『なにわがた』や『葦分船』の刊行された時代で、その他にも幾多の文学雑誌が行はれてゐた。それが四五五年の後に衰へてしまつた頃、豫て潜勢力を養つてゐた青年の間に勃然と実行力を盛り上げてき、そこに関西青年文学会が成立しこれが鉄幹の新詩社成立

の一翼を荷うに至り、その機関誌の『よしあし草』は文学史的に観ても記録に値されるだけの仕事をしてゐた(『明治代表詩人』の伊良子清白の項)ことを述べている。こうした内容については彼はいろんな所で述べており、この関西青年文学会を中心とする動きを明治期大阪文壇の最盛期としていのである。これには彼が直接この會に携わっているのによることが考えねばならぬのは勿論である。従つて單純に彼の言葉をそのまま鵜呑みにはできないが、新文学創造への意欲の盛りあがりがあったことは充分認めねばならぬ。もともとこの文学会には高須梅溪も中心的人物として活動していただけではなくそも／＼の発起者として終始この會を育てるのに最も力を盡くして、彼の大阪文学史への意欲もこれを中心と考えている。

こうしたことからその価値批判は一応さしおくとして、この會に携わっていた者達には自信を以てふりかえられるだけの意味を持ったものであることは疑えぬ。そこでこの文学会の動きを明治期大阪文界の一つのピークをみることに異論を挟む必要はないと思えるので、これを一つの探求のより所として同時期の大阪の文学状況といったもの、又それとの先後関係・影響関係といったものを探ると、次のようなことが知られる。関西青年文学会の活潑な動きは他をも刺戟してこの時期には文学的なグループがこの他にも結成され、其等相互の間で何らかの連絡を図ろうとしている。これは明らかに大阪中心の文壇的なものが形成されたとみるべきで、大阪独自の文学史を成立せしめる手がかりが得られようというものである。而も酔茗の回顧談中には其等に先んじて文学の動きの活潑であったことも語られている。ここに歴史的変遷のあるのも窺われ、地方の一時期の一つの文学的な動きにすぎない酔茗達のグループがその土地の何らか

の文化的な流れの中に位置するのがはっきり認められるのである。

所で、酔茗達に先だつての二十六年頃の京阪文学の隆盛は浪華文学会を中心とするが、これについては『堺利彦伝』の中に記す所がある。尤もこれも個人の自伝中の記事のゆえに文学史的な反省は全然されていないが、この西村天囚を中心とする大阪朝日新聞社系の文人達の集りが『硯友社』『都の花』『早稲田文学』『柵草紙』『逍遙』対『鷗外』『紅露』などという東都文壇の非常な賑わいに応じようとするものであり硯友社の一派と多少の關係を持つものであったことは同文中より知られる。これはまたこの會が中央の文学の動きと何かのかかわりを持つのを示しているが、これだけではなく、『早稲田文学』を追われた者が加わり、又會員中の木崎好尙・磯野秋渚等が『柵草紙』に寄稿する等中央との交渉の活潑な事実も示されている。従つて当時の中央誌に於てこの會の機関誌の『なにはがた』『浪花文学』が批評紹介の対象となつてゐるのは当然だが、そうした文中で当時の大阪の文界の盛んなことが云々されているのは注目し得る。つまり浪華文学会だけではなく、大阪毎日新聞社系の文人を中心とする大阪文芸会、堺利彦等の華城文学会等が組織されて夫々文學關係の雑誌を出し相互の間で文學に關しての論戰が行われてゐるのである。そうしたことは大阪の文壇というものが一応形成されてゐるのを示すものである。又このように見ると、関西青年文学会を中心とした時期の状況と外貌の似ているのが知られる。従つて酔茗等の回顧が興隆第一期第二期と夫々を名づけているのも尤もと思える。然しこの兩時期相互の間の關係を考えると、直接のかかわりは全然認められぬ。前者は後者を準備したとは見えぬし、又後者には前者を繼承するとか否定するとかの意識は全然見られ

ぬ。浪華文学会を中心とする時期は既述のように硯友社的なものを中心とする東都文壇が或る意味で地盤となっていたが、関西青年文学会は新人の投書専門の『新声』『文庫』を直接の拠所としている。東都文壇即ち中央にあっては、新人の抬頭が硯友社的なものを批判し否定していつて次の動きが展開されているが、そうした中央文壇を媒介としてはこの大阪の二つの時期も変遷の経過を辿ることはできる。大阪という土地に於て時期を接した文界の状況であるのに相互の関係よりも夫々中央との関係の方が密接なのである。然しその中央との関係もこれ又一様でないのに注意せねばならぬ。中央で指導的位置を占めている諸雑誌が浪華文学会を中心とする大阪の文界にふれて注目していることは既に述べた通りである。関西青年文学会を中心とする場合には『早稲田文学』は唯『よしあし草』の創刊に注目したきりで廃刊となったため前者の時のような注目のしようはなかったものの、この時期に指導的立場を以て地方の文界の動きに注目を示したりもしている『帝国文学』に至っては全然この会のことにはふれてはいない。『よしあし草』『関西文学』を寄贈されていることは明らかなのに一顧も与えていないのである。それでいて関西青年文学会の刺戟のもとに刊行されるに至った『小天地』については絶えず詳しい内容が紹介が行われている。大阪を中心として実際の動きの価値評価を行うなら、此等の中では最も関西青年文学会の動きが新しい文学樹立への意欲を以て『文学界』から『明星』への一連の動きに倣うようにもかくにも明治の新しい文学の樹立に与っている。浪華文学会が中央と交渉を持つ人間が多かったとはいえ或る者は中央から追われているということによっても明らかであろうに類れた意識が濃い。『小天地』は『ふた葉』の後身であるが、

「ふた葉」が『よしあし草』を模して新人の養成に努めていたのと違って中央で或る程度名を成している者の寄稿を中心とし新人の文学樹立への意欲は全く失ってしまった。こうした夫々のあり方に對して中央の評界で浪華文学会を採上げ（この会の存在した時は『帝国文学』はまだ刊行されていないが、後に関西の文界にふれてはこの当時に稍見るべきもののあったことを回想している）『小天地』を云々するのは、単に中央文界に名を知られた者が加わっているというだけの理由に基づくと思える。地方文学史が全体の視野の中で中央の動きにかかわっていることは重要な条件であるが、このように本質を見逃した中央の関心だけに頼ることは地方文学史のみならず中央の文学史をも誤るはずであろう。そしてこうしたことに大阪の文壇というもののあり方の一つの特色を考えねばならず、大阪文学史というものが中央の文学史と異なった態度のもとに採上げねばならないのにまず気づく。

三

次に考えねばならないのは、明治期の大阪文学史に於て一応ビクと目すべき二つの時期が、中央の文学の動きを媒介にせねば夫々つながらぬこと及びその中央の介在のしかたが地方の実際の動きの本質とは必ずしも一致していないことが大阪に於ける他の文学現象にもあてはまるのであろうかということである。

関西青年文学会一つだけを考えてみても、これは中央の『新声』『文庫』を拠所として発足しながら鉄幹の『明星』を育てあげる基盤の一つとなった。中央を媒介とするだけではなく中央の動きの媒介の役をもつとめているのである。つまり一つの大阪の文学運動に於てもその中央のかかわりかたは常に同じとはいえぬ。となると、

単純に従来の文学史で問題にされる要素を持っていた二つの時期の中央とのかかわりで注意される事柄で以て他の時期を割切ってはならないのに気づく。こういう所からはやはり一応具体的に明治期大阪の文学的なあり方を概観する必要があるが、中央の動きと異なつて殊にその全貌を掴むことは困難である。醉茗や梅溪の回想記によると、彼等の文学運動に直接の影響はないもののその少年期に大阪で出版された文学関係の雑誌に或る程度の文学的な動きのあったことを認めている。とすれば雑誌出版物の動向を探るので最も大阪の文学状況を探り概観する手がかりとなるものであろう。

大体、中央文界に於て泰西的な意味で文学という意識がはっきり表われるのは『新体詩抄』『小説神髓』に於てである。必ずしも常に地方つまり大阪が中央の動きの後を追ひそれに倣つて泰西的な意味の文学が作られていったとは限るまいが、幕末より明治へかけての変動期にあつては政治文化の中心である東京の動きが一応確立しなければ新しい理念が地方で定着するはずはあるまい。現代的な意味の文学の理念がともかくにも中央に於て示されて始めて地方に及んだものとの場合にはどうしてもみねばなるまい。となると明治期の大阪の文学というものは明治十五六年以後と考へねばならぬ。所で明治十八年に大阪で刊行された雑誌に『文学雑誌』というのがあるが、ここで考えられている文学は現在いう所ではなく文章に關係のある學問凡てを含んでいるようである。これにはシェークスピアやテニソン等の作品の抄訳がありはするもののそれは英語修練の爲であり、内容の中心となつてゐるのは歴史地理等を始めとする泰西の學問の紹介である。こうした内容は幕末から明治初期にかけての所謂啓蒙期のあり方と同じである。そして西周の『百學連環』

の文章学の条には文章学即ち文学としており、池田弥三郎氏の『三田文学』の解説(『文学』一九五六年六月)には「三田には古く『文学会』というグループがあつた。詳しいことは訳らないが、明治十六年の『文学会雑誌』第二号が残つていて、それには福沢諭吉が『文学会會員に告ぐ』という文章を書いている(続福沢全集七卷)。それによつて、當時文学会と稱する集りがあつたことが訳るのだが、その場合の『文学』とは、後の理科系文科系という時の『文』にあたる概念らしく、経済法政文学が未分化の状態にある概念の様であつた。」とある。『文学雑誌』の意味している文学と同じとみられる。尤も『文学雑誌』と名づけられたのが西周・福沢諭吉の説に従つたと考へてしまふのは當を得まいが、周や諭吉が文学をこのように意義づけているのは彼等のあり方からして明治初期の中央の普遍的な考へとすることができるとなる。となると十八年頃に大阪でこのような雑誌が出されたのは、中央に於ける啓蒙の動きが地方に浸透していつて地方で自主的にそうした動きをするようになった表われとみてよいのではなからうか。翻つて中央の啓蒙期の今日いう所の文学の動きを考えると、當時にあつて一応確立した形の文学として意識されていたものは鷗外の『雁』から『唐紙に摺つた花月新誌や白紙に摺つた桂林一枝のやうな雑誌を読んで、槐南、夢香なんぞの香奩体の詩を最も氣の利いた物だと思つてゐたのが知られるのである。ここに記されている『花月新誌』についてはやはり『雁』の中で「西洋小説の翻譯と云ふものは、あの雑誌が始て出したのである。なんでも西洋の或る大学生が、帰省する途中で殺される話で、それを談話体に訳した人は神田孝平さんであつたと思ふ。」と記されている。もとよりこの記述のままに西洋小説の最初の翻譯が『花月新誌』に

載ったそれだと単純に信すべきではないが、少くとも明治を生きた鷗外の回想として明治文学に直接つながる泰西小説の翻譯の普及性を持った表われの最初がこれであつたとは容易に認め得る。更にこの漢文の戯作中心の『花月新誌』には泰西に関する歴史的地理的解説も相当に載せられている。従つて漢詩文・和歌という伝統的文学形式に啓蒙の意図を持つ紹介文をはさむことに当時の文学青年というべき者が新しい息吹を感じていたのが、鷗外という明治の文学の動きを或る意味で代表している人物の回想によって明らかになる次第である。そしてこれは啓蒙ということに明治の新装の文学が胚胎していたことを示す。

一方、大阪に於て最も高級な文学雑誌の最初と現在考えられているのに『兼葭俱佐』がある。これは明治十二年十月の創刊にかかり、その創刊に當つて東都の『花月新誌』に倣う旨の題詞を菊池三溪が記している。『花月新誌』に寄稿していた彼が顧問として臨む雑誌についてそのような態度をとるのは当然であろう。が、もと／＼この雑誌は関西在住の漢詩人が中心となつて大阪朝日新聞社から出版されたもので、三溪が『花月新誌』の寄稿者であつたこと以外には『花月新誌』と『兼葭俱佐』との間には必然的なつながりは考えられぬ。にも拘わらず顧問の三溪がこうした挨拶をしているのは、中央のあり方を地方に映すことが当然と考えられている当時の文界の意向を映すものとみられる。而もそこには多分に中央に匹敵する高級な雑誌にしようとの意識も働いているので、当時の大阪の高度の文学的な動きは中央に倣うことにあつたに相違ない。然しこの雑誌は旧来の伝統様式を守つて『花月新誌』のような新味はみられぬ。つまり『花月新誌』に倣つて而もその最も本質的なものは全然とりいれて

いない。到底『花月新誌』の役割を大阪に於て果しうるものではない。啓蒙的な動きとの関連に於ける新文学の胎動が漸く大阪に表われるのは十八年の『文学雑誌』当時まで待たねばならぬのか。大阪に於ける啓蒙的なあり方はそんなに遅れていたのか。啓蒙的なあり方として中央に応じるものを求めると、官板として大阪府から出された『明治月刊』(明治元年九月)の存在に気づく。他にも英人ウイセヒ編の『各国新聞紙』が同じ頃大阪で出版されている。此等の内容は啓蒙期の通性として政治上の要求と結びついた歴史地理等の知識を供給することにあつて、芸術としての文学とは直接かわる所はない。従つて此等から文学が導かれなかつたのは不思議ではないが、歴史地理の知識は先にも記したように『花月新誌』の重要な内容でもあつて、そこに漸次新文学のめばえが醸されそれと同時に伝統様式との間の問題も自ずから含まれていたのが中央のあり方である。然し『花月新誌』を模した大阪の『兼葭俱佐』には『花月新誌』がうけつた啓蒙と伝統様式とのつながりもなければ同誌が持った享受層を通じての後代へのつながりもないように思える。もとより中央と違い当時の享受層を他の資料より類推することの困難さもあるが、これの内容からは『花月新誌』が持った後代へのつながりは考えられぬ。その上十二年十月創刊翌年の四月終刊という短時日の刊行であつてみれば他への影響は大きくない。尤もこの前後に詩文歌句中心の雑誌が大阪でいろいろ刊行されている。『兼葭俱佐』と其等との間に関係があるかどうか、『兼葭俱佐』の創刊号には『花月新誌』に倣うことが謳われているからには先行の大阪刊行の詩文雑誌を直接に意識していないことは確かである。然し大阪に於て既に詩文中心の雑誌の刊行されていたことが関西在住の著名な漢詩人達が

集って『蕪葭俱佐』刊行の機運となったことは否めまいし、これが廃刊になって後も雑誌刊行に伴う団結のあったことにより漢詩人達が別な雑誌に寄稿する機会を容易に与えられるに至ったことも否めぬ。共通の寄稿者の認められることはそうした事情を語るものである。だがここに注意すべきは、十五年二月創刊の大阪に於ける『桂林余芳』には創刊号に東都の『花月新誌』に刺戟されて刊行の旨を記していることである。これは『蕪葭俱佐』の題詞と共に『花月新誌』が如何に影響する所大きかったかの傍証となるが、大阪刊行の諸雑誌中で高級な享受層を狙おうとするものが寄稿者間につながりがあるに拘わらず大阪発行のを云々せず常に中央に倣うことを明記するのは何故か。関西在住の漢詩人中心の編集のため単純に中央依存とばかりは断じきれぬが、大阪の文学状況を無視する所に東都即ち中央文界で『花月新誌』が荷った新文学創造への橋渡しの役を遂に荷いえなかつた一つの理由を考えてもよいのではなからうか。そしてこうした『蕪葭俱佐』を中心とする大阪の文界の状況と中央との関係は、等しく中央に刺戟されながら明治二十年代の浪華文学会・三十年代の関西青年文学会の動きとはそれに加わった文人達の大阪の文界に対する意識の相違によりかなり性格は違うものとなっているのである。つまり『蕪葭俱佐』当時のものはまとまった文界の動きを持たず中央とは何らかのつながりを持ちながら大阪の文界の先行するものも後続のものをも意識していないが、二十年代三十年代のそれはまとまった文学運動への意識を持っており——中央ほど理論が洗練されず不徹底には終ったが——中央を媒介として両者にはつながりがある。

このように十年代の大阪の文界の状況は個々バラバラで中央のよ

うな新文学の準備は認められず、『文学雑誌』に於て初めて啓蒙と新文学の萌芽とがみられるのはその前後関係よりは些か突然変異の感なしとしない。尤もこれは従来の様式による文学の発表機関というわけのものでもなく又新文学を創造しようとの立場に立つものでもなく、ドリナン女史の属する米国セヨトウクワ文学会の日本の支会として日本文学会を結成し学問に志ある者に便宜を与えるということを標榜するものである。そうした事情によればこれが大阪で刊行されたのは全く偶然にすぎぬ。唯中央の動きの地方への普及化の一端にすぎぬことがその刊行の事情から窺えるのである。醉茗・梅溪というはつきりした意識のもとに大阪で文学運動を行うと共に中央にも進出した人達が回想してピークとみなしている時期に先行する大阪の文界の状況は一応このように性格づけられるが、後の時期は又どのような性格を持つのであろうか。

四

関西青年文学会は中央とつながりを持ちつつ関西の中心として活動することを常に強く推し進めていたことは、その文学運動を検討した際に窺えたことであつた(『女子大文学』国文篇第七・八号所載「関西青年文学会の文学運動」参照)。こうした動きはこの会の機関誌の廃刊後も新詩社大阪支部にうつがれてかなり活潑に『明星』派の歌人を育てあげることになった。然し新詩社の大阪支部も結局は中央の動きに制せられると共に大阪の文界は大阪の文界としての推移もあって変化してくる。大阪に於ける『明星』の投稿者中に関西青年文学会と直接つながりを持たぬ者達のグループが三十年代後期にはできてきているのである。又こういう現象は『明星』と大阪との関係の稀薄になったことによっても生じてきているものであつ

て、中央文界との関係が変化を来してきているのが明らかに認められる。それと同時に三十年代後期から四十年代へかけては大阪に於ける同人雑誌がかなり数多く刊行されているのが認められる。大方は一・二号で廃刊になっているが、純文芸創作の小グループが多く結成されそれは大阪だけの同好グループといったものである。醉茗等の回想による興隆期に於ける文学会の態度とは異なって小規模になりながら文学としては純粹になっている。大阪だけの動きの間では明確なすがたをあとづけえないが、中央に於て漸次試練を経た泰西的な文学概念の地方への浸透定着が行われ分化してきていることもこうした断層的なあり方に窺えるのである。

五

明治期の大阪の文界の動きは、以上に見てきた所によって大体三つの時期に分けて考えるのが妥当であろう。つまり明治二十年前後までと二十年代から三十年代の半頃までとそれ以後とに分けられる。中央の場合は三十年頃を以て大きく区劃でき、細かくは『新体詩抄』『小説神髓』に最も顯著に示される草創的な十年代のあり方と二十年代に入ると硯友社を中心とする動きと『文学界』を中心とする動きというものを区別して考えられよう。然し此等は一応夫々区別して考えられるものの、泰西の浪漫主義思潮の輸入紹介につとめたと常識的にいわれている『文学界』が硯友社に対立する意識のあったことも明らかながら同誌が硯友社については開国以来の時勢の好尚に応えたものとして「宜なる哉硯友社の一時に雙手を揚て迎へられしと。試に当時の我楽多文庫、文庫、新著百種など繕て、紅葉、眉山、思案、水蔭、漣、九華、漁山などのものせし新文学をよむに、げに其内には新しきアダム、イーヴのさま／＼に姿をかへ、

洋行歸りの紳士ともなり、……その姿は艶に、その想は風流に、その時は春に、その年は若く、その情は弱く、その色はあざやかなり。……まことに硯友社の迎へられしは此新時代の趣味を満足せしむべき、その渴きたる希望を満足せしむべき愛児なるが故なり。」と記している。この限りでは又『文学界』とも同じなのではないかとの疑問を抱かせられるが「実に当時の風潮は硯友社を欺きしのみ。……遠く養はれ、深く培はれ、堅く根本より立つところのものにあらずれば、一時の風流はわづかに人のまなこを眩せしむるに過ぎざるべし、きのふ漸く伝へ来りし美術の種の、けふははや忽ち花をひらくと見るは、これまことにあやふき夢ならずや。千年の雨露をもてこの国に生ひたちたる儒教仏教などの旧思想の、一日にして基督教思想希臘理想などにうつらんと見るも、これまた心細き夢にはあらずや。当時の西教徒といふものもまことに西教徒といふべきは少なく、多くは儒家釈氏などの泰西といふ仮面をかりて来りしものなれば、旧来の美術家小説家哲学者詩人などの又「新」といふ字をかりて顕れたるもの多し。硯友社を養ひたる Cradle 中には実にかくの如き蛇をかくせり。……さればかの騒壇の機なるもの一朝一夕にして熟すべき者にあらざるべし。新思想の旧思想の破郭に破り入りて、始めてその深奥なる台上に相戦ふの時は、人心漸く苦しみ来り、天地を考へ、人生に悶絶し、深く幽明のさかひに冥想して、情燃え、想熟し、こゝに始めて真のユースを生じ真の「レナイッツサンス」を生じ、この氣癡てジニヤスとなり、発して詩となり小説となる。明治の詩人なるもの豈に一時の画工にしてやむべきものなるべくや。」(二六年十一月)との批判に於てその区別を明らかにしている。つまり『文学界』は開国以来の皮層的な泰西の模倣を批判して

本質の把握に努めようとするものであるとしている。それにしても硯友社的なものとは共通の地盤に立っていることをはっきり自覚している次第であって、夫々つながっているのである。それに比し大阪の夫々の動きは相互の關係のことを夫々の荷担者が意識していただけではなく、實際の動きの内容に直接のつながりは見られない。そこに中央の動きとは異なった性格があり、区分にも中央に対すると異なった採上げをせねばならぬのがわかる。然し大阪に於ける夫々の動きには中央の文学史に於て迎れる文変意識の変遷推移に應じた質的变化が認められる。これは先の動きを後の動きが批判した所に生じたのではなく中央に於ける変遷推移の結果が自明のものとしてうけとられるに至った文学意識に立脚して夫々が動いているによる。そうした中央との關係に加えるに夫々の荷担者が明瞭に意識した中央の動きへの対し方が又動きの性格を決定しているというのが明治期大阪の文界の状況である。要するに区分上では中央と同じ区分ができないに拘わらず潜在的な意識の点で中央の変遷に應じているという二重性を持つ次第なのである。

六

とにかく明治期を中心として大阪文学史をくみたてようとする、大体以上のような中央との異なりを前提として採上げることができるのではなからうか。そういうことを認めた上で考えねばならないのは、こうした地方文学史が中央の文学史にどのような寄与をなすかであろう。所で明治期の大阪の文学というものは文学史全体の立場からいえば表面に表われて大きな位置を占めるべき性質のものではない。個々の動きとか作品とかの価値は中央に匹敵し得る程のものではない。最も中央の動きに大きくかかわった関西青年文学

会にしてもそれ自体の表われの限りでは新進の修業の場としての意義を荷うものでしかない。然し明治期という全体の中で考えると、今まで中央の動きだけを取扱って地方のそれを問題にしていなかったため中央の動きに於て大きな見逃しがあったのに気づくのである。つまり明治期のような新文学樹立にかかわる新しい文学意識の成立がどのような時に普遍的に定着して遂に新文学の確立となったかが地方の動きの検討により動的に知られる次第である。更に中央の動きの交替が単に中央だけの条件で成立しているのではなく、根深く地方の動きにも立脚しているのが知られる。こうしたことにより明治期の中央文学史の正しい把握のために地方文学史としての大阪文学史の必要なのが考えられるが、大阪文学史の問題は単に明治期だけにはとどまらぬ、その上この明治期の特に大阪という土地に自主的な文学を育てようという意図した醉茗等の文学会はその意図を成立させねばならぬ条件として元祿期の京阪中心の文学の存在を謳っている。もとよりこれには中央文界に於ける元祿文学への関心の影響もあるに相違なからうが、大阪の土地に於ける過去の文学を採上げて自らのあり方への範としようとしていることに大阪の土地に密着した伝統への反省を認めねばならぬ。

このようにして大阪文学史の考察を進めてくると、明治期を中心としながら必然的に明治期以前の問題が浮びあがってくる。これは又大阪の土地に新しい文学を生み育てようとする所から生じたものでもある。従ってここからは将来の文学への問題を孕んでいるのも知られ、伝統と創造とを含む文学史の動的な把握のための地方文学史の問題は一応明治期大阪の文学状況を考察する所に孕まれていると考えてよいのではなからうか。